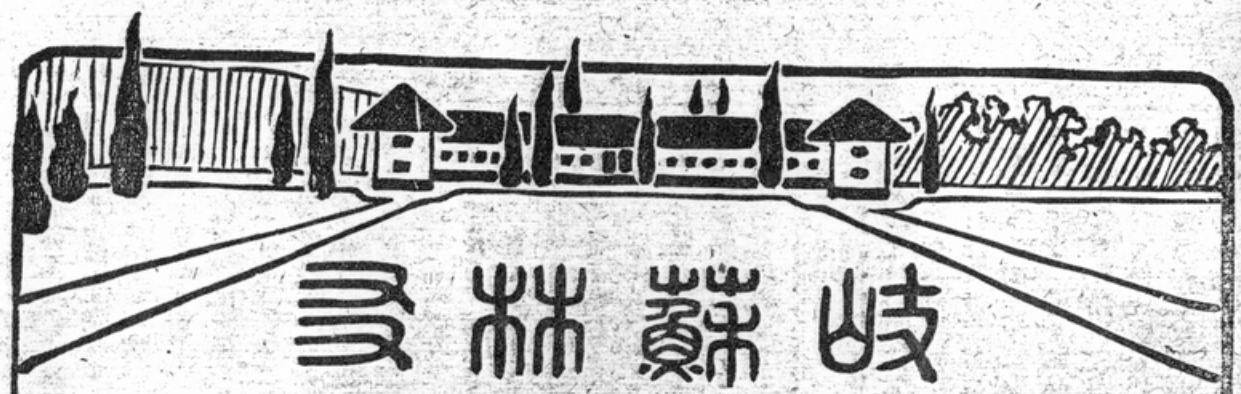

岐阜林業

目次

□論說
此れからの人
□隨筆
亞米利加合衆國より
出鱈目
梧隆より
日記の中より
修學旅行日誌
和歌
□雜報
學校便り
會員消息
其他

大正七年九月廿五日　第百七號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

論說

此れからの人

宇志生

◉過日旅行の途中某林業家と逢ふ。仝人は有數の林業家にして且つ理想的、積極的進取的を以て名あり。

◉「林學專攻者には懲々した、到底これからは、大學であらうが、專門學校であらうが、林學出の者は使はれない。攻玉社出か商工出が最も吾等に必要である」。と盛に林學出身者を罵倒して余りなし。

◉其何が故に然るか、曰く「林道一つ設計せしむるも數十日を要し、結果は甚しく拙劣なり。一度鐵道院に依頼して設計すれば旬日ならずして完全なる案を得、又製材所を設置せんとすれば、器械の名さへ知らず況んや其設計をや」と

◉余は即ち之に答へて「貴下の言は尤もなり、現代は一人の人間を雇へば造林もし、利用もし、製造もし、林道も、ケブロカーも鐵道も、製材所も何でも彼でも、之に向つて要求し期待するは當然と云へば當然ならん。然し如何に學士なりとて、やりてなりとて、學校出立ての人否如何なる人も、しかく八面六臂なるべき筈なし、又嚴正に云へば林業と云へば原始的產業なり、恰も農業の如し。

林產物の生產殊に林業は連續生產と云ふ事が眞の目的なり。景氣がいゝからと云つて林業家が工業の立場を占め、更に商業上の取引を爲さんとするは、深甚の用意を要し且つ工業專門、商業專門の者の智識を借るが當然ならずや。

關連せるが故に必要ありとすれば林學を修むる者は、あらゆる方面の學問に涉らざるべからず。

立場を換へて工業專攻者に就て見るも思半に過ぐるものあるべし」。と

◉後又或醋酸會社の重役と逢ふ余に告げて曰く「相當の報酬を拂つて得たる林業專門家にやらして見れば、材積の測定に迂遠極まる方法を以つてし、然も其結果は炭燒夫の推測と異ならず、且つ乾餾による木精の分離法を知らず。製造せられたる醋酸の良否識別も之が定量分析の如き更に知る處なし。斯の如くんば何も林業專門家を招聘するの要なし」と「そは即ち人による、然し營業的經營には林工兩者の協力を要する事勿論に分析の如きは藥劑士を勞すること捷徑にして確實なっん。分科的現代の敎育は愈々萬能たるを宥さず」と余は簡單に辯明をなせり。

◉飛躍的工業の勃興、此時に當つて吾人は徒らに工業專攻者の素晴らしき大景氣をのみ羨望すべきにあらざるべし。

我林業の中には吾人の努力に依りて、研究に依りて、極めて有効に極めて有利に經營せらるべき幾多の工業を包藏せり。生產を

閑却するに非らざるも、有利なる利用、換言すれば林産物若くは之に關連せる産物の製造工業機械工業は正に吾人の手を俟つもの多く、且つ之が隆盛に隨伴して林業の勃興重視を誘致すべし。

◎某林業者の談、醋酸會社員の言は即ち現代の要求を表現し具体化せるものなり。翻りて吾人の内容を顧みる時忸怩たらざるを得ず。林道も、林産製造も、製材工場も、分析も、一つとして確信あるものなし。只僅かに林産製造に於て意を安んずるのみ。

◎在校生諸君、諸君等は夏期休暇中或は醋酸製造の實地に就て練磨し、若しくは製材工場の研學をなし、或は材積測定の習練に一部の勞費を割かるべし。此れ諸君が社會に出でゝ必ずや期待さるべき事なればなり。

◎尚校友諸君、本誌上林産製造上の研究、按出、視察等實社會の實狀を發表せらるれば幸甚之れに過ぎざるべし。敢へて望む。

隨筆

亞米利加合衆國より

西野入德

拜啓四月號我校友會報本日難有落手致し候打ち絶えて御無沙汰致し居り候にも關らず御見捨てなく遙々此異國迄御送り下され候御厚意、奉深謝候、浪客となり候以來頗る多忙の爲め母校戀しからぬにはあらねど、つい疎遠と相成候次第不惡御海容被下度候御國と別れ候と共に林業とも別れ候事として此方面に特殊の注意としてはばらひ申さず候ため、皆様の御研學上御參考ともなるが如き通信をなし能はざるを遺憾と致し候。されど餘りの御無沙汰に今日こそは何事かを書かねば氣澄まず相成候へば、直にペンを執り自ら眼に映じ心に感ずる事共の中、林業に多少關係あるもの一二書き聯ねて無音の御詫に代へ度候。若し御一讀下さる御方も有之候はば誠に喜ばしく候。

■ ■

偖大戰以來、殊に米國の參戰以來米國の林業即ち伐木製材事業は非常の活氣を帶び、開國未曾有の盛況を呈し、之に依つて得る在米同胞の利益尠少に無之候。

其數字統計を擧げて之を攻究するは頗る趣味ある企に有之候へ共戰事中官憲の郵便物檢閲甚だ嚴格に有之、事苟も戰局の進展に不利を來すが如き事項も記しあらば容赦なく沒收せらるる實情に有之候へば、純研學の資料たる林業統計とは云へ、若しや當局の忌諱に觸るゝが如き事もあらばと案せられ候まゝ、此企を中止致し唯當の障りなき事ども御便り致す事と致し候。

一、燐寸に就て

米國一億余人に依りて費消せらるる莫大のマッチは、開戰以前は一部米國内燐寸會社にて製造せらるるものの外は大部分日本及北歐スカンヂナビア地方より輸入せられしが、開戰後スカンヂナビア地方よりの輸入は一頓挫を來し、一方日本よりの輸入は船腹調節の必要上價格の割合に客積尨大なるかゝるマッチは米國禁輸令によりて禁輸となりしかば、其賣價忽に騰貴し米國マッチ會社は大努力を以て其活動範圍を擴大し、今や日本製商標のマッチは毫も見當らざるに至れり。此有様にては戰後禁輸を解かるゝと雖も一旦販路を擴張せられたる米國々内製マッチを驅逐して日本マッチの販路を新設するは蓋し至難の業に屬すべく、此一大顧客を全然失ふ事なしとするも爲に非常の打擊を被るを免れ難かるべし。されど日本マッチは今や支那本土、滿蒙及南洋、南米印度方面に著しく販路を擴張し居るを以て一面米國に於て打擊を蒙るも敢へて非觀するに及ばざるべし。

二、自働車に就て

新聞に依れば日本には此頃成金と稱する一階級生じ、其中には富使用法の心得淺く公德心缺乏し自働車をば、玩具、贅澤物と心得、公衆の迷惑をも顧みず砂煙を立てゝ人込中を快走し敢へて恥づる色なく爲めに社會の反感を買ひ、自働車は中流以下大多數日本人の敵愾心を挑發する具たるに至りしとか、實に遺憾の次第なり之れ自働車の罪に非らず、其使用者たる所謂成金の不心得を咎むべきなり。

かかる人は自働車を買ふ前一度米國に來り、自働車使用者が如何に公德心に富み富者が如何に謙遜なるかを見られん事を切望す。

所謂日本の成金なるものが米國田舍の一寸した百姓にも及ばぬものなるを知りなば自働車購入を見合せ、其費用を以て社會教育團的のものを組織する氣となるべし。

思はず横道に入れり。元に歸りて偖て自働車は米國林業界に於て如何なる程度に迄利用され居るやを見ん。今や米國の自働車は日本の馬車、荷車、人力車、同様運搬上必須の實用品となり馬車の如きは殆ど跡を絶ち只稀に支那人の貧乏洗濯屋が不景氣な馬に鞭打つを見る位にて、辻自働車、荷物配達自働車、等は織るが如く爲めに電車の收入さへ著しく減じ物議を起すに至りし程なり。されば由來都會とは緣薄く山を相手の林業界にも自働車は侵入し、製材所内物品の運搬は元より其製品すら。板類、小物及薪類の近距離運搬は自働車に依る。尚件の製材所に就働する職工勞働者には數哩隔りたる町に住居し、毎朝自働車にて出勤するもの多く朝の八時頃となれば製材所附近の空地は自働車を以て埋められ、宛然自働車展覽會の觀を呈す。

日本に於ては富豪の贅澤品たる自働車が米國に於ては一日賃金如何程にて働く勞働者の仕事場往復の實用品たるゝ面白き對照なり。

三、飛行機とShruce

飛行機は船舶と共に現戰爭に最も必要なる武器の地位を占めつゝあるのみならず今や汽車、汽船、電車、自働車と共に平時の交通運搬機として利用の道を進めつゝあり。此頃行はれたるニウヨーク・フィラデルフィア及ワシントン市間の飛行機郵便物運搬成功の如きは其一例なり。六噸の郵便物を搭載したる飛行機々一萬一千餘哩の距離を百五十八時間即ち一時間七十哩の速力にて首尾よく飛行したり。かかる試みは漸次其歩を進め戰後は客飛行機の出現も敢て遠からざるべし。かく も有望なる前途を有する飛行機々何を以て製作せらるるか？之に要する條件は

一、輕き事　二、強き事—の二とす

此二條件を具備したる材料を得んが爲めに專門家は苦心探究を重ね、或は中空の金屬桿を作り、或は竹を用ひ木材に至りては幾種となく試驗を重ねし結果、スプルースを以て最良と斷定せられたり。尤も伊太利に於ては專ら Douglas-Fir を使用するも之は Shruce を得ること能はざるを以て止むを得ざるためなる由。

Shruce 飛行機製作の最良材と斷定せらるるや米國内は如何なる深山と雖も該樹の存する處忽ち森林鐵道を布設して之が伐出を急ぎ從來僅かにピアノ調音器の一部に使用せられしに過ぎずして、木材市場に殆ど其存在を認められざりし Shruce は今や材界の王となるに至る。

之につき思ひ起すは木會高山御嶽駒ケ岳等の山奥、人跡未踏の邊、鬱蒼と茂り空しく野獸の跳梁に委し老ひては白骨となりて徒に土に還る多量の Shruce なり。今や日本も小規模乍ら民間事業として大隈老侯を會長としたる帝國飛行協會あり一方軍事當局に於ては亦專門に研究しつつあれば、此山奥の持腐れの富の世に出づるの日遠きにあらざるべし。否講ずるに道を以てせば今之を直に米國の飛行機製作所に向け輸出するも有利の企ならん最早時間なくなりたれば今日は之にてペンを棄つべく候餘は又の日に——

皆様の御幸福を祈り上げ候　敬具

第四十二回目アメリカ獨立祭の翌日

米國の客舍にて誌す

なつかしき母校の友へ

出鱈目

蜂須雅生

○勤務演習はいつも盛夏の候とて、僕の様な黑助が一層黑くなる、だから本來の薄い鬚は有るか無いか捜すに苦しむ様になり、目丈が黑い顔の中央にぎよろりと鋭く光つて居る様は、丁度大茄子に電燈二個、然し笑ふ勿れ、茄子に電燈も一朝有事の際は眞先かけて突進し、近よる敵も何のその降り來る敵彈にてみ返して陛下の御爲に其身を捧げる事の出來る、唯一のしんぼうなるべければ。呵々。

今回は卒業生では、川崎君、宮川君、及余の三人、遠藤君が遂々來られなかつたのは遺憾であつた。余は同期の者三名と聯隊近くの百姓屋に下宿した、家内の者も面白屋三人の者も實に呑氣家ばかり、同氣相求むるの例へに漏れず、日直將校を定めて其日其日の世話をする事にして愉快に氣樂に三週間は夢の樣に過してしまつた、こんな事情の下に、軍事を除ては特別に書く樣な事はないで、思ひつくまゝに時々の事を出鱈目に書いて見る。

○今日は現地戰術、中村中佐殿の一隊と篠田中佐殿の二隊との二隊に別れ演習地に趣く事になつた、余は篠田參謀殿の股肱、演習地まで三里もある其途中篠田教官殿歩き乍らも電柱が目に付くと質問に曰く、「電柱により發電所のある方向を知る事を得るや」「あの鐵線は何番線なるや」「橋に差掛る又曰く、「此橋梁を破壞せんとするには何れに爆藥を裝置すべきや」此川の深さを遠に知る法如何」と、豐橋に入る「豐橋にはエスが何人居るか」、まさか左樣な事は問はれない何しろ目に觸るる物皆問題として問ひ且つ說明しては行かれる、是も勤務演習を可及的有利に過ごそうと云ふ僕等の心裏を測量せられて演習地に至る迄の短少時間をも利用し余等を敎へ保護して呉ると思へば不平も出ない、志願兵の萬年將校君皆御互に言ひ合せた樣に出來そうな問題になると前進して吾れ茲にありと云ふ風、形勢不利と認むると、心の中でそつと足踏みの號令と共に歩調止めで中佐殿の殿狩して豫定の退却の時の勇者を氣取る、余の如き其指揮官だつたかも知れない。

中佐殿余に「君は山林學校卒業生でしたな、郷里は？」「西筑摩であります、」山の中だなあ、木曾の棧つてどんな工合になつてゐる」、生命保險に這入らなければ通れない程危險な處です、「ふうん」、ところが夫れは昔の事、明治の大御代には四列側面の隊でなり中隊縱隊でも通れる樣な立派な道が出來た、のみならず鐵道が開通して敎へて貰はなければ知らずに通つてしまいます。「常に山の中に居ると坂路を登る事は流石に强いだらうなあ、」「はー山地戰ならば中佐殿、乍失禮私が敎官になつて上げます。」其内思ひ付た樣に、「○○君此の間の檢閲の時志願兵で某校卒業生は銃の臺に使用してある樹の名を知らなかつた者があつたよ、處が山林學校卒業生は流石に知つて居つたよ、」と言はれた。銃床には近時胡桃の外ぶな、かつら、ほうのき、さくら、等種々なる樹を用ひる樣になり其上に藥品を塗つて在るから一寸判りにくい、同じ木ですら產地に依つて餘程質を異にするので、木曾の檜と大和の檜を竝列して見ると、大和のは果して檜であるかと疑はれる程で、製品にしたものゝ樹種を見別けるのは、中々に經驗を要するのだ。

中佐殿は飛行機が進步するにつれて、陣地撰定上土地の起伏と云ふ事などは價値が幾分減ぜられて、飛行機すら偵察に困難な森林が戰術上の價値を增大する樣になつたと話された。

○敎官の問題大隊長殿の問題、共に明日午前中に提出せなければならないと云ふので皆猿股一つになつて答案を書き初めた、余は手廻はしが善かつたと云ふ体でするく構へ込んで蚊帳の中へ一人御先きに失敬して居た、三人は汗を拭ひ乍ら論じ立てゝ居るのが如何にも氣の毒に見ねた、やれ砲兵を何處へやるの、やれ機關銃をどうするのと支隊長殿名案百出容易に決し兼中々に答案が出來上りさうもない、明日は豫後備兵の檢閲で拂曉に參列しなければならないと云ふのに、既に拾二時、まだ第一問題を講究中とはさてもさても可愛想な話、自分獨り蚊帳の中で太平樂をきめ込んで居ては餘り冥加の程が恐しいとも思つた、そしてありもしない同情を口の先でして、上げるのか下げるのか冷かすのか、先方は氣が氣でないと云ふに、其上蚊軍は日本軍人が何であらうと決して恐れず、背後より側方より前後より包圍攻擊をする、猿股の上から陣地の弱点も何もあつたものではない、處嫌はず襲擊する、とても毒瓦斯如きにびくともしない、蚊帳の中から見てゐると誠に御氣の毒ではあるが大喝一聲、「夜間作業は靜肅にすべし」と一生懸命の處定めし癪に障つたらうが我慢して拜む樣に「氷か、サイダー

を周旋してくれ給へ、こうなると少しの時間も惜しくなるのは學校に於ける試驗前夜と同樣」「馬鹿な日直將校でもあるまいし、浮世の馬鹿は起きて働け、」然し騷がしくて眠られないし、且自分も渴して來た時分とて蚊帳の中から拔け出し附近の僕等の賄所に行つて主人公と男爵で、サイダアを飲み菓子を食つた、二階から窺ふと未だやつて居る樣子、勘定は「高い集會所では一本六錢だよ貧乏少尉だ此頃は下士の方が割がよくてなあー」特に務めて何錢として置きます、いや大尉に負けて置け曹おまけしては遣り切れません、などゝ諧謔交りの口調で挨拶などし扨自分はたつぷりとなつたので何か惡戯をと考へてつい思ひついた、定めし是を見たら怒ることたらう。空瓶を貰つて余の飲み餘りは云ふ迄も無く隣客の飲み餘り、さては○○のそれ迄も徵發して二本を作りうまく蓋をして殘りの菓子と共に下宿へ持ち歸つた三人の者それとは知らず喜ぶ事感謝する事限りなし「まてよ」共同會計簿にサイダー菓子金何錢蜂須賀立換と記載飲食を許した、まるで餓鬼、飢へたる獅子の如く飲む食ふ食ふ飲む、そしてこれでこそ「○○少尉殿だ」と又曰く「今夜のサイダーは特にうまい」とこんなに感謝されるなら今一本位作成して來てやればよかつた

○今日は豫後備兵の檢閲、三名の者の所屬時隊へ行つた僕の昨夜從卒が來た頃留守して居た「君の中隊は何でも六時頃の敷列だと從卒が云ふたよ」頃が怪しいそこいつ信を置けないとは思つたが後れたら其の時だと實は内心恐る恐る五時頃中隊へ出頭した處が週番士官殿只今御目覺と云ふ處「今朝は又べら棒に御早いですなあ」只「はい」と云つたきり別に云ふ言葉はなかつた中隊の者に聞くも將校が整列時間を知らないとあつてはサーベルの手前將校面をさげて歩けぬ、と云ふて知らぬのは仕方がない何しろ最早出て行つたのか、未だであるか判らない、そつと當番に事務室から口達錄を取寄せさせて見た、處が中隊は檢閲課目中隊敎練午前十一時整列とは何のこつたい、一杯食はされた哩、人間はどこ迄も横着なもの、こうなると張り詰まつた氣も、どこへやらなる何しろ朝から眠くて仕方がない

午前十時出發中隊長殿は流行性感冒に侵されて居るのを勉めて出塲せられた、余は第二小隊長暑い暑い今日は今迄此の暑さであつた陽炎が眩しいばかりに立ち登つて居た演習地へ行く迄にすつかり茹だつてしまつた、中隊長殿は又銃させて兵を松林の中に休憩さした、間もなく某中隊の突擊が初まつた、喊聲は揚らぬ、そして隊は亂れて居た我中隊の整別中隊長殿が聯隊長殿に人員報告「總員八十五名内豫後備兵十五名」「豫後備兵の動作と云ふ能はず、故に是に合したのです」、とは中隊長殿の聲の擧らなかつたのも宜なるかなと思つた、愈々演習開始想定を與へられた、第一、第二、小隊散兵第三小隊は援隊 目標何々 何百各個に打て！援隊は伍間に增加！駈走！もつと早く！等の中隊長殿の命令號令に息をもつかず前進した、敵陣間近になるや、中隊長は突擊を令した、士卒皆極度に疲勞して居てもそんな事は感ずる隙がない、あらゆる喊聲を張り上げて突込んだ、敵は潰走した、演習は確かに前中隊より能く出來たと思はれた、是で終了では無い、追擊に追擊、漸くにして追擊中止を命ぜられたが一休もせず中隊の密集敎練、整正嚴格に行はれなければならぬ密集敎練が疲勞後如何なる程度迄に出來るかを檢するのだ勇往邁進實によく出來た。

檢閲終了、

服からは汗が浸出して絞る程、汗で目が開かぬ位、皮膚は丁度半日も入湯して居た時の樣にふやけ上つてしまつた。

講評が初つた、聯隊の將校は皆集まつたが我中隊長が見ねない、聞けば演習終了するや卒倒、注射して目下休養中との事であつた、講評は各中隊何れも低氣壓の雲來ばかりいよいよ我中隊に移つた定めし御褒めに預るだらうと思つて、内心鼻を高くして居た所が聯隊長殿曰く「中隊敎練は現役兵多

今回は卒業生では、川崎君、宮川君、[illegible]も打勝つ事が出來るが、病氣には實に弱いものであると思はれた。

○人間にはどこ迄も横着といふ病氣がつくものだ、營門をくゞつてからの心理狀態と下宿へ歸つた時の心理狀態とは、實に雲泥の差がある、炎熱燒くが如き中に働いて居る時の樣な心持が常に腦裏を去らなかつたなら常にその樣な氣が張り詰めて居たなら或は墮落病にも侵されず、彼岸の光を以て已が足下を照す光たらしむるに至らんかと信ずる、最後に母校の發展と諸賢奮勵とを祈つて擱筆する。（完）

梧蔭より（續）

星波生

◎眼前の廣大なる自然と裕々とした心の平和とより外に何物も知らなかつた古い時代の人達は、否古い時代と云ふより過去の人達は最も山林を愛し、田園を謳歌する機會を現代の人々より一層に把有し得たと思ふ。生活の追擊社會の恐怖などに頭を惱まして居る間に自然を離れて行く現代の或人達は實に哀れむべきではあるまいか。

理窟を知つた現在の人達が余りに山林を侮辱し、田園に重きを置かないで、理窟をしらない過去の人達が極力之を謳歌し之を讃美したと云ふのは余り矛盾した話ではなからうかとも思はれる。

知れない、否吾人は寧ろ其誤謬ならん事を切望するものである。

成程國有林整理、御料林整理或は共有林の發達實に立派なものである、砂防法、森林法實に人々が對森林思想の精粹を示もて居る。然し眞實に國民の思想を代表すべき私有林を見る時は思半に過ぐるものがあるであらう。

◎「杉植るて田迄養ふ清水かな」俳句としての價値を論究し俳人を攻擊する程の能を遺憾なが持つて居ないが併し、價値は兎も角此觀念は誰も持つて欲しいと思ふ。

◎俳句をして近代の文學上に動くべからざる地位に至らしめたのは吾人は正岡子規と內藤鳴雪を擧ぐるに吝でない。然し其遠くを想起すれば必ず誰しも先づ芭蕉に指を屈するであらうと思ふ。

彼の行脚の掟と云ふものがある。其中に草を愛し木を尊ぶ意味が充分に窺はれる。

「一枝も取るべからず」の尊ぶべき心が嬉しく感せられるのである。

◎米國では古くから一枝一草をも之れ愛すの心殊に愛林の觀念を養ふために植樹日と云ふのがある。

之れはルスコッブ博士が創設した日で一ケ年中の一日を選んで全國公立學校生徒をして山地に植栽を行ふ日である。以來米國で

[illegible]育を兒童に授けて居ると云ふ話である。

◎吾人は元より敎育者でもない學者でもない。然し吾等の幼稚な頭腦から割り出しても林學と兒童と密接ならしめる事は望ましい事ではあるまいかとも思はれる。

◎我國でも明治二十八年ルスコッブ博士が渡來してから文部省の奬勵で兒童植樹が盛に行はれる樣になつたさうである。

曰く戰勝紀念。創立紀念。基本林。御大典紀念等の名稱が附してある。

然しこれも「近頃は大分飽きたのか廢れて來た」と或人は話して居た。

◎時の推移、思潮の流と云ふ事がある。單に士を掘つて樹を植ゑる——そんな事許りで兒童の頭腦に植ゑ付けられる樣な易ッポイ愛林觀念でもあるまい。

◎兒童と森林——將來健全な國民として生活すべき新らしい智識と男々しい身体とを養はれつゝある兒童が徒に都會の汚濁な空氣中に蠢動して新綠の美、落葉の麗に親む事を閑却したならば如何なる狀態に陷るかは想像するに難くないと思ふ。

◎梧葉落ちて一入窓が明るくなつた。

虫が鳴く月が澄む。

「愛林思想」と云書籍がある。我前校長安藤先生の著である事は今更說く迄もない事である。

其第一章に於て兒童と樹木なる題が見ゐる

愛林思想の觀念は兒童に初まると云ふ事を暗に指示したものではあるまいか。

◎よく吾等の前で「あなた達の生活は實に有望で森林の世の中です」と說くものがある。其十中八九迄は吾等に對する一時的御世辭に過ぎない。

吾人は辭を改めて云ひたい「あなたの裏山を御覽なさい」と

◎高嶺に咲く成功の花よりも麓を飾る歡樂の花に醉ふのは人情の弱い所である。

百年の長計を立てて後世を慮るよりは現在のみ考へて思ふまゝ氣まゝに暮したがるは人情の常である。

◎社會の荒波に揉まれて小利をのみ趁ふて走る人を顧みるよりは純潔な鳩の如き兒童を森林と結び付けよと吾人は云ふものである。

林は清い、だから純潔な兒童を好む。

森は美しい、だから可憐な兒童を望む。

◎幾ら都會の眞中に住む兒童でも、行路樹の綠や遠く望む山岳の恩惠位は知つて欲しいものだ。

吾人は都會兒童等に否町の兒童に問はう。

「汝の飲む水、汝の使ふ水は何處から來るか」と。

まさか只單に河から來ると答ふる馬鹿もあるまい。若しあつたなら兒童の罪か、社會の罪か、或は所謂小學校先生樣の罪か、其れ迄は追求することを欲しない。

吾國許りでなかつた。

印度でも希臘でも靑史に照して明らかである。古代の獨逸なども其祭式には悉く樹木に賴つたとの話がある。

聖地の半は之れを森林中に設け、林樹の下で國會若しくは裁判的集會をなして居るのが見ゐる。

現に今でも聖像を樹枝に揭けて讀經するの風習があると云ふ。

◎又獨逸では特に樫の木を神聖として戰神ドナールを祀り、若し樹へ雷光が命中した場合には殊更に其れを尊崇するさうである

◎樺の木には又女神のフリッブを祀つてあると云ふ。よく新聞雜誌などで獨逸地方の風習を讀むと新嘗祭に店頭へ嫩葉を澤山飾ると云ふ話である。これなども古代信樹崇林の遺跡ではあるまいかと思ふ。

◎山林の破壞——それは國の亡びる時起るべき現象ではあるまいか。敵國の兵が侵入し神社を壞し、林地を荒壞せしめ、此處に於て始めて起るべき現象ではあるまいか。

◎支那では一般に山地が荒廢して居ると聞いて居る。彼國の今の有樣は同種相食むの狀である。內亂—革命—こんな事のあまり珍らしくないのは只支那許りであると云ふも差支ない。

「伐木丁々山更に幽なり」と詩人を謳はしめ「山靜かにして太古に似たり」と其鬱蒼を想像せしめた山が、荒廢した時に國が殆んど

思ふ。

◎亡國が先か、亡林が先か、兎に角之が平行的に進むのも面白い。

我國でも名君若將と云はれた程の人は必ず植林治水に心を置いた、して見ると國と森林とは其興亡を共にするものであると云ふ事が多少窺はれる。

而も耕作稼穡に心を留むる前に先づ山林の經營に着手したと云ふ事は二考三考の價値があるものではなからうか。

◎上代は暫く措いて、戰國時代即ち元龜天正の頃の名將、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、直江山城守、或は加藤淸正、黑田如水の如きは皆治山治水を以つて知られて居る。

◎暴君と云はれた人は十中八九迄が山と水との問題で民の恨を買つたものである。

講談や演劇で名高い佐倉騷動の如きは、所謂治水問題の戰慄すべき結果ではあるまいか。

◎嘗て或人からこんな話を聞いた。插話として記して置かう。

「大石良雄が君仇を報じて肥後の殿樣、細川家に御預けとなつた時の事である。

肥後の侍の安塲と云ふ人が良雄に遺言を尋ねた良雄は「別に遺言はないが、肥後の國は薩摩へ近い。自分は先年薩摩へ行つた時に澤山の黃櫨を見た。之を植ゑたいと考へたが暇がなかつた、どうか肥後の國へ薩摩

◎これ丈の話である、眞實に人を馬鹿にした樣な一二分間の對話の宇片に過ぎない。而し肥後の國產として今に傳へられて居る黃櫨がこんな二三分間の話から生れて來たと云ふのも何かの共鳴を吾等の心にあたへる樣に感じられる。

◎大石良雄が植樹を勸めたと云ふ事は余り世に知られて居ない。君仇を報ずることは何時の時代にも出來ることでない。然し植樹は何時の時代にも而も誰にも出來る。

◎何時であつたか土井岡山縣師範學校長の話に此大石の話が出て、自分は再び耳にする事が出來た。其時「植樹と云ふことは主君の仇を報じた精神と同樣に國民に取つて大切な事ではないか」と云ふ意味の事を付け加へて云はれた事を記憶して居る。

◎吾人は度々生意氣にも敢て云ふが凡そ一縣一郡一町村敎育の中樞に立つ人々には假りにもこんな考へかあつて欲しいと思ふ。

◎亡國と森林、そんな意味で森林を尊び愛するよりは先づ直接吾等の感じの上から見る方が宜い、生活の上から、國家の上からと云へば立派であるが、其裏面には或る穢はしい意味が潜んで居りはしないかと思はれるからである。

◎秋來ぬと眼にはさやかに見にねども風の音にぞ驚かれぬる」いつか知らぬ間に秋に

焰を吐いて見た迄である。もう時計は拾時である。ここらで擱筆することにしよう。

日記の內より

大坪時治

故山をあとに深き名殘を惜みて骨肉舊知に別れしは、百花華かに笑みて我が旅裝をかざり、春風輕げに衣の袖を拂ふ時なりしが、いつしか花去り、青葉も行き、秋月また更けて、悲風樹梢を鳴らし、枯荷枝を折り凋落の山野又皚々の雪をかつぐこと二回、漸く三春の花に相逢ふうれしき身となれり。されど遣瀨なき兒心のなつかしさと戀しさの朝夕に、なほ晝夜の別もなく絕ねぬ思に過ぎ來し二年の傷める情や如何なりし。馬山の浦のいぶせき小屋を照らし月は淸かりしかど、木曾の山路にさすらひの身となり し後は、しばしの名殘なるも涙に宿りし老母の面影なか〳〵に消ねやらで、雨にも風にも、唯安かれと祈る願の驗もなく、此の月ごろ病床に臥し給ふとの來信。嗚呼如何せん。焦心既に何等の甲斐なし、「嗚呼、千里の雲山、時なる哉、命なる哉。

今宵も獨り居の煩悶と悒鬱とに倦みつかれたる或は、胸の思を癒すべく宵まだ淺き灯の町へとあこがれぬ。

日頃なれば淋れたる町のならはしとて通行の人も希なるに、今宵に限り騷然たる有樣は祭典ならずば、他に何事かあるらしき氣

「興善寺に活動寫眞あり」といふ好奇の手細引かれては如何ともなすべき手段なく、遣瀨なき憂を癒さんと足を寺內に運べば、觀衆既に堂に滿ち、緣に溢れ、更に入り來る人波は彌が上に重なり、押すな〳〵と喚く樣は生きながら牛頭馬頭の苦しみに遭へるが如し。

やがて寫眞は映されそめぬ、一、戰爭畫報二、貯金漫畫、三、悲劇、と移り行く寫眞に流石喧囂たる觀衆も今は水を打ちたる如くに我れに歸れり

我又、氣もいつしかフイルムに奪はれて今は何等の憂悶なく、固執なく妄念なくすべての觀念をふり捨てゝ圓滿眞如の眞我に復歸し、全く趣味の人に化せんとする時フイルムの數は盡きて閉會の宣告はつげられぬ。

外苑に出づれば、今し鬱林を離れし月、斷雲の飛び行く隙をもれて春の夜には珍らかに皎々たる輝を添へて、伽藍より操出す數百の人に光を浴せかけぬ。

海棠の花に媚あり月光る

梅に媚ぶ月も木曾落は四月哉

月澄みし方寸間の伽藍哉

遲迷なき花に興あり朧月

春來るに寢れる木曾の雜木かな

月夜每花見に出づる男かな

宵更けし月は更なり二千兩

山靑み草春にして人逝きし

（叔母の死をいたみて）

門前を拔けて、裁判所の夜櫻を仰ぎ、大手橋を渡り、更に下町の寂寞を破り、淸水町に出で、西方寺の崖下に至れば木曾川の流は茫々たる響を脚下に起し、右岸の森林は黝然として眠り、默然として云はざる中に神祕の妙韻を微かにつたふ、又仰いで中空を望めば、蘇峽の月は亂脈なる雨後の雲間をもりて、音なく更くる伽藍の擔を照して四邊をはらひ、靜かなる溪谷の夜氣は毒々と身に襲ひ來る。偉なる哉自然の景色、無盡藏なる我自然の力。暫く橋欄によりて越方を思ひ未來の空想を畫き、更に人生を憂しと觀すれば、世の中は匆忙煩雜の聲にして、人生は五十年を一期とせる浮游と異ならず、地位名望、富貴位階の桎梏に繫かるゝ一瞬の聲にして醒めて儚なき髑髏一片の後を思へば哀れさ限なし。

又母の面影目前に榮ひ來る

恩愛の月や涙に曇るらむ

今宵共に母と見まはし馬浦の月

病人の音信に月の色曇る

儘よと宿に歸れば闇然たる一室は萬氣を呑める氣配なり、室に入り電氣を捻れば燦然たる光は室內に滿ち、垢じみたる坐蒲團と破れたる小机一個、孤獨に迷ふ主の歸りを待顏なり、欲念より起る情かそも自然の情か、我がものとすればすべての物が懷かしくおぼゆるものをかし床に入れば○時過ぎなり。

第二學年修學旅行日誌（承前）

清流生

五月二十三日 晴天

昨夕より少なからず我等の心を惱ませし天候も今朝は一天晴れ盡し旭の金線は東天に幾條となく輝けり午前七時電車にて三島に向ふ涼しき朝風に車窓を打たせつゝ馳する事約一時間にして下車日頃より渴望し憧憬に飾られ居たりし箱根越は今日なり三島神社に參拜勇氣充滿せる我等五十有餘の一行はゲートル草鞋の裝嚴重に嶮路峻坂旅人のなやみ〳〵しと云ふ箱根路に登れり石を一面に敷きつめし羊腸たる道、傾斜緩かにして何處に天下の嶮峻ありや我等の高潮したりし元氣も少しは弛まざるを得ざりき、さりながら長き坂路頭上より暖かき日に照り付けられては如何なる我等も疲勞と渴を覺ひき、されば崩ゆる若草の上に座し元氣の恢復を求め接待茶屋の茶に咽喉濕し此處も過ぎて行けば相模の地に入れり今や道は下らんとする所道を挾みて兩側に鬱々として天を摩するばかりの老杉は立ち繁れり此の並木、昔を忍ぶ皆蒸す並木、箱根路の眞價を添ふる杉の並木、其の時貧弱なる我が腦裡にも期せずして山林業の貴とさを思ひ浮べぬ。

やがて周廻五里近き芦ノ湖は眼前に現はれたり凄きまで靑く澄める湖は四圍の山々の綠樹を醮して湛然たり此の邊元箱根の町あり淸麗閑雅なる離宮を後に道を新舊隨意に擇べり新道は行く〳〵曾我兄弟虎御前の墓を弔ひ老鶯の聲も靜かなる鶯坂も過ぎ行けば湯本に着せり外人成金の此地に遊ぶもの多く自働車は容赦なく路行く人に塵を浴せつゝ通へり箱根跋涉に疲かれしも何のものかは一行は電車にて俗化せる此の仙境を後になせり彼の、英漢早雲が空拳蹴起して覇業五世の基を立て豐太閤の雄略も持久重圍に辛うじて陷れたる小田原の城に昔を偲びつゝ蒼波烟る相模灘を眺め國府津にて東海道列車に乘り海水浴場に名高き大磯を過ぎ藤澤にて江ノ島行きの電車に搭ず立ち並ぶ多くの磯松を後へ〳〵と見送りつゝ片瀨に至る白浪の土に架け渡せる棧を渡り行く暮色既に蒼然として至り遙に豆山の眉の始きを見る此の夜江ノ島一の惠比壽屋旅館に旅裝を解く夜は沈々磯近き家の燈火チラ〳〵と岸に碎くる波の音驟雨の如し

五月二十四日 曇天

午前七時迄自由行動七時に片瀨電車停留所に集るを約して江ノ島の頂なる江ノ島神社に參拜雅兒ケ淵を俯瞰しつゝ一條の細徑を下れば岩窟の前に出づ金輪際より八重の波排し分けてそゝり立てる巖根とて深さは幾千なるか底知れず怒濤澎湃飛沫は狂雨の如し窟內に入て辨財天を拜し元來し道に返り五月蠅き客呼びの聲を後に江ノ島を去れり片瀨にて鎌倉行きの電車に乘らんとせる頃より雨の脚は垂れ初めき腰越の古蹟を過ぎ七里ケ濱邊に至れば雨全く霽れたり元弘の

昔名將の劒投せし古戰場も過ぎ駿かき春の日に眠るが如き大佛長谷の觀音に詣で青葉若葉暗き鎌倉を弔へば寂々として栄畝麥隴の間に眠るが如し八幡宮に參拜し東なる賴朝の墓を弔ふ五重の石塔青苔滑かなり之ぞ天下の總追捕使の成れの果てか空しき風は脚下に麥浪を寄するのみ。

更に鎌倉宮に詣で護良親王の萬斛の恨を殘し給ひし龍窟を弔ふ朝敵を滅さんとして却て逆臣の爲めに幽閉せられ名もなき一逆臣の手にかゝり敢へ無く此の岩窟内の露と失せ給ひし親王の御心や如何なりしならん夫より歩を返し建長寺を訪へり嗚呼一木一草是れ舊都の遺物ならざるはなし流雲飛燕敢て鎌倉盛時の春を飾りたるものと類を異にせんや午前十一時五十一分名殘り惜しくも鎌倉を辭して横須賀に向ふ驛前に荷を托し直に軍港に至る待つ事稍久しくして一水兵に案内せられ工場内を參觀す彼方の海中には大小幾多の艦艦黑き煙を吐き威風堂々四邊を拂へり。

大平の眠りを覺ますセウキセン（蒸氣船）
たつた四杯で夜もねられず

とて黑船四雙に枕も高からざり上昔を思へば、我が帝國の長足の進歩驚くべからずや我等は軍艦榛名の參觀を許され三隊に分れて艦内を巡覽す本艦は實に二七五〇〇噸にして乘組員一三〇〇人を有し 毎時二七、五節の速さなりと云ふ一大浮城なり今更ながら海軍生活の嚴肅にして雄壯なるを感じつゝ艦を辭す彼方此方に破壞船體の横たはれるは哀れ沈没の悲運に遭遇せし筑波艦の殘骸なりとぞ一巡して軍港を去り東京に向ひて進む本邦唯一の横濱貿易港も後に我等を乘せたる汽車は電車と競爭しつゝ刻々花の都に迫りつゝありやがて品川も過ぎ東京驛に下車す電燈の光煌々と雲突くばかりの西洋造り自働車電車の往き來縱に横に引きも切らす蜘蛛の巣に似たる電線實に都の雜然たるには驚歎したりき二重橋前に壯嚴なる皇居を拜し連雀町なる旭樓支店に投ず

立道 清楓 生

東都に入る

横須賀海軍工廠の作業の音、起重機の音、さては林の如く浮んだ大小數知れぬ船より吐き出す空をも染めさうな黑煙にあきつた我等は、榛名艦を辭しステーションへと歩を運んだ、待つことしばしにしてやがて東京行の東中の人となつた、車に搖られ乍ら中央ステーションはどんなに壯大なものであらうか？二重橋は須田町の電車の乘場は？などそれからそれへとしきりに空想を描いた、汽車は一瞬千里品川驛といふ車夫の呼聲に氣がついて車窓を眺めた時は電光赫焉たる花の都は眼下に開展してゐた、やがて中央停車場前の大廣場の人となつた時の胞中目で見るもの耳で聞くもの一つとして珍らしくないものはなく只喪伸した樣に唖然たるを得なかつた、第一に目についたのははるか彼方の暗空に光を放つ電氣博覽會のサーチライトで心膽を寒からしめたのは文明の生んだ厄介者とでも云へそうな自働車であつた。

上野動物園を見る

滯在二日目は風は少しも無く佳い日和であつた、午後一時といふ頃友人數輩と電車を走らせて上野公園奥清水谷の動物園を訪うた、園内入口に近い所は老樹枝を交へて日影をもらさず、晝尙小暗い程である地には縞笹、龍のひげ、等一面に生ひ繁つて庭園の趣をなしてゐる、此の附近にオーストラリヤ產のペリカンとて嘴の面白い鳥がゐるが、奥に聞ける禽獸の聲に誘はれ足をとゞむる者が少い、歩を轉じて少し左へ行けば池あり、池中には金魚浮び蝦は得意の技を演じ、鰻が岩間をぐる〳〵と卷き丁度大軍の城都を包圍したかの樣に見ける、其の隣なる西洋館の中には觀客の目を最も樂しませる象が居る、煎餅を與ふるに鼻で吹きよせ口に入れる巧妙さ而して其体格の偉大なるは實に陸上の王たる所以であるしかし恐ろしい所に何となく可憐なる所があるので人に愛せられる其の隣に突立つ山の樣な脊をした駱駝が居る其隣は虎だ山月未だ出でざるに凄風俄に起るといふは猛虎の眼を怒らして吼ゆる聲である、さて轉じて獅子を見れば其の威風堂々として四邊を壓する、北海道の白熊は己が自由を得ざるを怒り力をこめて奮起し爲に室内動搖す、鶴は本園には非常に多く到る所にゐて君子然たる姿を發揮してゐる、時々大聲立てゝ叫ぶが鶴の

一聲もこゝでは甲斐ない犬は猿をひとみ猿は犬をにらむ、縱ひ黃河の水は清く澄み歐洲の大亂は圓滿に終結するとも犬猿の平和は到底望む事は不可能である、かやうにして猛獸の聲に耳をそばだて、やさしき鳥の聲に送られ歩を移す内にいつしか園内を一周しつくしたいつまで見てゐても際限ない故割愛して辭することにし門を出た。

一學年旅行日記

藤田 生

權平峠突破――第一日

六月二十六日我等一學年一同は宮川、小貫兩先生に引率されて靜かに眠る福島の町に三日の別れを告げて五時の汽笛と共に町を離れた、あかぬ木曾川の曙景を車窓に賞翫しつゝ約貳拾分にして宮之越停車場に着いた。汽車から下りた頃は垂れて居た雨雲も消れて重なり合つた紫の雲が勢よく東の方へ走つて居た、此の前から一條の大街を辿つた、道の左手には名も古い德恩寺が薄靄の中に茫然と描き出されて居た、薄紫に眠つて居た山も森も朝靄と共に解けて奇麗な四圍の朝景色が織り出される頃山吹山に足を止めた、臺の石碑が雨に亂れた山吹に埋められてあたりの一木一石は奥深く寂びた古を語つて居た、此處から道は爪先上りになつて其の上、草と小石に埋つて居る、一條の溪流を右手に控へて角の多い小石に足を痛めながら進むと狹い道は濕つぽい峠の昇り口へと導かれて行く喘ぎ喘んで漸くウバガミ峠の頂上に達した時岩の上に喘ぎを沈めたが目の前に横たはる權平峠を見ては突破の困難を想像した、丁度目的の權平峠の昇り口より五六町進んだ頃は全身ビッショリ汗に濡れて居たが駒ヶ嶽の涼風と雲間より漏れる驟雨とに汗を拂はれて一息苦しさを休めたが空腹は益々空腹を覺ゑ腰の辨當が氣になる計りである、まだ初夏を知らで溪谷を飾る梅桃の殘花二三点寂惚けた鶯の一聲小馬の嘶が峠の路に愛敬を添ゐる等雅野趣が湧き出して來る、白い手拭姉さん冠りにした娘が小馬のたづなを取つて峠を下つて行く處等を眺めるとしみじみと峠の觀念が呼び起さるゝ骨の有る我等四拾餘名の健兒は、健脚を飛ばせて十里に近い此の峠を突破することが出來た、眺望絶佳の此の頂上で辨當の包を解いた時の嬉しさは胸一ぱいであつた、羽化登仙とは實に此の事であらうか、自分は暫時休憩の暇を利用して心に燒きついた苦しさ樂しさを日記帳に載せた、

曉の霞を破つて浮び出た伊那の町を目の前に眺めながら峠を下つた、伊那の農學校を視察して後辰野行の電車に乘つたのは午後三時すぎであつた、辰野へ着いたのは丁度五時半頃でショボショボと降り注ぐ雨の中を此處から汽車の便を借りて上諏訪へ向つた、林の樣な煙突を車窓に眺めて岡谷を通過した、此の際此の壯大な規模を眺めた各自はそれぞれ豫想以外の感想を漂はせたであらう、汽車は勢よく暮色の瀰つた諏訪湖の淵を走つて居た、諏訪湖の夕景色に趣味を添へた諏訪の町はぼんやりと油畫其の儘に横はつて居た、町へ着いて下車したのは七時頃でしめじめとした町が電氣の花に包まれてぼけた樣なうすい珊瑚色に飾られてゐた、我々は鐵鑛泉なる旅館に導かれて旅の疲れを慰めた。

和歌雜詠

山口にて 彷雪

おそしとて友よ急ぎそ山家道つぶらに月の光るこの夜を

露しげき草葉のかげになく虫の聲あはれなりさやけき月夜

石走る水の音ひゞく奥山に若き思ひは千々にくだけん

垣根よりかすかにゐるゝ鈴虫のなく音にあかし日のことを思ひぬ

雨はれて靄は山の尾めぐりつゝ空もひぞかに夕暮れにけり

雜報

學校便り

○登山及森林視察、第一學年生は宮川、小貫兩教諭引率八月廿六日御嶽に登山、頂上及び王瀧に各一泊の上、廿八日歸校、第二學年生は塚越教諭、沼田書記付添廿六日登山頂上に一泊翌廿七日歸校、三年生は七宮

校長、島內敎諭引率上松、小川、王瀧、阿寺、鰔川等各伐木所視察の爲廿六日出發、三泊の上、廿九日歸校せるが何れも天候良好なりし爲め十分の視察を爲し得たり殊に山上は近來になき快晴にて宇宙の大觀を恣にして歸來せり

○マラソン競走、九月六日小學校庭を基点とし寢覺迄マラソン競走を行ふ結果左の如し、因に今回は休暇後間もなき事とて精力も未だ十分ならざるものあり又前期の試驗を眼前に控へて出場を躊躇するものあり旁々出場の勇士少く成績も甚だ振はざりしは遺憾なり

等級	所要時間	姓名
一	四十七分五十秒	早川嘉一
二	四十八分二十秒	岡庭泰平
三	四十九分十秒	矢野佑
四	五十分四十秒	遠山虎雄
五	五十二分	野本美嘉
六	五十四分十秒	千田瑞穗
七	五十六分	沼田書記
八	五十九分十秒	中越三郎
九	六十一分十五秒	吉澤豐一
十	六十三分十秒	丸山林一
十一	六十三分三十五秒	木村榮一
十二	六十五分四十秒	坂卷利一
十三	六十七分十五秒	柳澤虎三
十四	七十四分五十秒	小貫先生
十五	九十七分二十秒	深澤佐愛

會員消息

○吉澤英雄君、六月十二日山林屬に任せられ東京大林區署詰を命せられ七月十八日更に山林技手に任せられ東京大林區署在勤旋業事務擔任を命せられたり

○原田義治君、今回大阪大林區鳥取小林區署に轉任八頭郡若櫻町大字糸白見官行事業所詰を命せらる

○古畑七三君、富山小林區舟見町保護區詰に轉勤せらる

○小林英一郎君、今回久留里小林區署を辭し暫く北海道山越郡八雲村に滯在せらるゝ由

○加藤源一郎君、八月下旬動員令に接し岐阜歩兵第六十八聯隊に入隊せられたり

○安江悅次郎君、仝上

○加茂憲太郎君、第一次勤務演習の爲九月一日より九十日間金澤野砲兵第九聯隊に入隊せられたり

○西尾彰君、第三師團の動員令に應召し既に滿州に向け出發せられたり

○米倉巧君、八月二十六日歸校即夜動員令に接し直ちに引返し目下名古屋師團に在隊中

○奥村利一君、今回全羅北道林業技手を命せられたり

○野村光智君、南佐久郡大日向村林業技術員に轉任せらる

○上條芳郎君、愛知縣第三區砂防森林事務所に轉任せらる

○川口勇二郎君、昨年末大連に渡り大に爲す所あらんとて滿州旅行の途次脚氣に罹り八月中歸國せられたるが當分內地に留る事となり王子製紙會社（靜岡縣）に入社せられたり

謝恩金領收報告

○內藤先生の分

金壹圓　宮川　岩見君
金五拾錢　白木　光雄君

○北村先生分

金五拾錢　吉澤　英雄君
金貳圓　宮島　岩見君
金五拾錢　白木　光雄君
金拾五圓貳拾錢　在學生一同

林友代領收報告

金貳圓　西尾　彰君
金壹圓八錢　吉澤　英雄君
金壹圓七拾八錢　前野　慶一君

大正七年九月廿三日印刷
大正七年九月廿五日發行
編輯兼發行人　長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地　川崎本雄
印刷所　長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地　川崎印刷所
發行所　長野縣西筑摩郡福島町二八九番地　蘆澤書店
定價　金三錢